

Music

デビル西岡との思い出 『Like A Bird On A Wire』

Text: George Cockle
文/ジョージ・カックル



See you, Devil Nisioka!

8月の初め、逗子の海に面したビーチハウス、『サーファーズ』である男を弔うセレモニーが行われた。百人以上もの人々が集まり、サーファー達はサーフボードに乗って海に入り、輪になって彼の死を悼んだ。彼の愛称はデビル西岡。80年代、アメリカの西海岸で日本のスケートボーダーとしてその名を知られ、今でも彼を慕うアメリカの若者は多かった。ここ20年程、彼は湘南に住んでいた。彼は一見、ワガママでやりたい放題の男だったが、その反面、とてもシャイで、英語で話すとなぜかすごく紳士だった。俺はそんな不器用な男がいつも気になっていた。

デビル西岡といつ知り合いになったのか、よく覚えてない。いろいろな場所で、偶然会うことが多かった。仲が良くなったきっかけは、彼が作っていた雑誌『サイボーグ』の対談に誘われたときだろう。場所は当時、七里ヶ浜にあったレストラン、JJモンクス。俺とカメラマンの横山泰介とデビルの三人の対談だ。その対談風景の撮影は横山泰介。ワインを飲みながら話しはじめ、お互いの歴史やサーフィンの話で盛り上がっていたが、次第に俺達は酔いが回り、会話がさまざまなおとこころに飛び始めた。泰介はシャッターを押し続け、ほとんど会話に入っていな

った。そしてオレはいつのまにか哲学者ジョーゼフ・キャンベルの本『千の顔を持つ英雄』の話をはじめた。するとデビルもその本が好きだった。この本が絆を太くしたのかもしれない。今考えると不思議なことだが、最近、俺はこの本をもう一度買っていた。以前、持っていた本は何年前かに電車の棚の上に置いてきてしまったのだ。次に読むときは、きっとデビルのことを思うだろう。

そして会話は音楽へ飛んでいった。デビルは俺と同じく詩人のロックアーティストが好きだった。その中のひとりがレナード・コーエン。カナダのソングライターだ。もともと詩人だったが、レコードを出したらヒットし、一躍スターになった。そして様々な人が彼の曲をカバーするようになったおかげで、ギリシャの島に引越して、そこで気ままな暮らしをはじめ、今もその島で住んでいる。

デビルが亡くなってすぐ、ラジオ番組『レイジーサンデー』の曲を選んでいたら、iPhoneからデビルが好きだったレナード・コーエンの曲『Like A Bird On A Wire』が流れてきた。まるでデビルが話しているような歌詞が続く。生きることに不器用な男の心情が歌われている。

“電線の上にとまる小鳥のように。真夜

中の合唱団の酔っぱらいのように。

俺は、俺のやり方で自由になろうとしてきた”

歌はこんなふうに始まる。鳥がワイヤーの上でバランスをとりながら止まっているように、自由ながらも不安定な人生を歩む自分がいる。そして歌詞は寂しさや哀愁が漂う内容へとになっていく。

“死産の赤子のように。ツノを持つ獣のように。俺は、俺に関わってくれた人をみんな、傷つけてしまった。だけど俺は、この曲に誓うよ。

いままでやった悪いことを。俺は、おまえがすべてなんだ。俺は、松葉杖に寄りかかる乞食を見た。彼は、俺に「求めすぎではいけない」と言った。そして、暗がりのドアに寄りかかる素敵な女性は「もっと求めてもいいんじゃないの?」と叫んだ。”

まるで、デビル西岡の世界そのものだ。俺は少なからず、彼の人生に影響されてきた気がする。

Thank you for sharing your life!



ジョージ・カックル ● 60~70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com